

二〇一九年四月号

# 仏女新聞

編集・発行 飯島可琳

「禅」はしばしば日本人のたしなみを象徴する言葉として用いられている。外国人宿泊客の多いあるホテルは、基本的な西洋のスタイルの中に和風のモチーフを取り入れた客室を「エグゼクティブハウス禅」と名付けている。「禅」日本独特の情緒」という認識は私の中にもうっすらとあった。坐禅を組み、自分を見つめる作法にある静けさは、いわゆる日本らしさにしっくりとくる。しかし、禅の教えはもとインドから中国を経て、日本へと伝えられたものだそう。うだ。「Japanese ZEN」と言

われるまでに禅が日本に定着したのはなぜだろうか。

## 黄檗宗大本山萬福寺特集

日本にある禅を説く宗派は、曹洞宗、臨済宗、黄檗宗と大きく分けて三つある。禅宗と総称されることもあるが、実際には禅宗という宗派は存在しないらしい。禅は中国から伝えられたと先述したが、実は黄檗宗という宗派自体は日本特有のものである。黄檗宗宗祖の隠元禅師は、もともとは臨済宗の僧であり、伝えたのも臨済宗の教えであった。しかし、江戸時代に隠元禅師が日本に渡来したのは、日本に臨済宗と曹洞宗が伝えられ広まった後だったため、既存の臨済宗とは区別されたのだ。本号で紹介するのは、宇治

にある黄檗宗大本山の萬福寺である。黄檗宗王龍寺の副住職、飯野さんに境内を案内していただく機会に恵まれた。

総門から三門へと向かう道の途中にある石碑には、菊舎という女性俳人が詠んだ句が刻まれている。

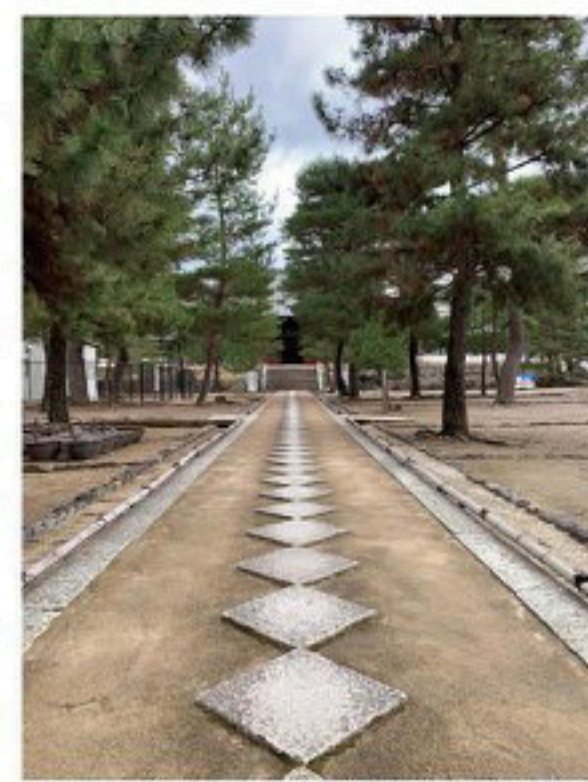
山門を 出れば日本ぞ

茶摘うた

黄檗宗寺院の特徴は、中国の様式を随所に取り入れていることにある。この句には、中国にいるように錯覚してしまいう境内と、茶畑から茶摘み唄が聞こえる日本らしい境外との対比が表現されている。現在は宅地開発が進み、茶摘み唄が聞こえてくることはない。しかし、境内の中国らしさは今に残る。



中国様式は境内全体で一匹の龍を表していることにも見られる。出入口にあたる総門あたりは龍の喉で、龍の目を模した二つの井戸がある。アーガイル柄のように境内に並べ



られた正方形の平石は、龍の鱗だ。思わず平石の上を選んで歩きたくなる。しかし、萬福寺での修行を経験した飯野さんによれば、萬福寺には住職以外は石畳の上を歩いてはいけないという決まりがあるそう。これからお参りする方は龍の逆鱗に触れぬよう、気をつけてほしい。

禅宗は釈迦如来を本尊とする宗派のため、萬福寺の本堂にあたる「大雄寶殿」の本尊はもちろん釈迦如来だ。堂内の壁面に沿う壇上には、釈迦如来の弟子たち十八羅漢の像も安置されている。その内の一体、跋陀羅尊者像の尊前のみ、ガラスケースがある。



者が人食い虎を退治する逸話があり、二体の像が表すのはまさに跋陀羅尊者が神通力で虎を鎮めたところらしい。必殺技は、息を大きく吐き何かを解き放つように繰り出すイメージがあるが、跋陀羅尊者は唇を堅く結び、頬を膨らませている。神通力は徳の高い人でも気張らなければならぬほど高度な技なのだろう。



どうしても形のあるものに目が行きがちだが、萬福寺のしきたりも独特だ。中でも強く印象に残っているのが追いつきである。追い出しは、入門するために訪れた見習い僧を先輩修行僧がお寺から追いつき振るかざし、「出て行け！」と大声で何度も叫びながら、見習い僧の後を追う。

でももらえるらしい。追い出す側の僧も、追い出された過去を経て追いつきを任される。禅の教えが伝承されるリレーだと思えば、怖いどころか心が温まる。

かいばん  
木魚の原形、開帳。

叩いて時間を知らせます。



写真は許可をいただいて撮影・掲載しています。また、本文イラストは、筆者のイメージに基づき描いたものです。取材にご協力いただきありがとうございます。